

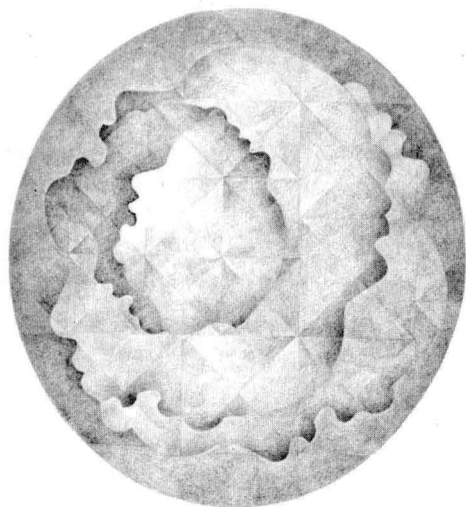
素直な戦士たち

城山三郎



素直な戦士たち

城山三郎



新潮社版

素直な戦士たち^{すなおせんし}

昭和五十三年九月三十日 発行
昭和五十六年二月十日 十四刷

定価九五〇円

著者 城山三郎^{しろやま さぶろう}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話業務部〇三二六六一五一一
編集部〇三二六六一五四一一
振替東京四一八〇八番
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
担にてお取替いたします。

長編小説

素直な戦士たち

目次

第一章	奇妙な「見合い」	7
第二章	女の信念	18
第三章	胎教	41
第四章	幼児教育	59
第五章	ある出来事	94
第六章	最初の試験	120
第七章	英才たちの冬	146

第八章 勉強部屋

167

第九章 中学合格

187

第十章 成績順位

218

第十一章 強者と弱者

236

第十二章 その

日の

253

後記

265

素直な戦士たち

第一章 奇妙な「見合い」

それは、奇妙な見合いであった。

あとから考えれば、その後起った悲喜劇のタネは、すべて、その見合いに顔をのぞかせていた。ただし、そのときには、松沢秋雄は、それをふしぎとか奇抜に思うより、まず新鮮なものに感じ、むしろ見合い相手の千枝にひかれることになったのだが――。

仲人が席をはずし、二人だけになったとき、千枝がはにかみながら、切り出した。

「あの、おききたいことがあるんですが」

「ええ、何でも……」

秋雄はうなずき、微笑して待った。いきなり途方もない質問を受けようとは、思ってもみなかった。

千枝は、胸をふくらませ一息つくと、まっすぐ秋雄の目を見ていった。

「あなたのIQは、アイキエーおいくつですか」

秋雄は耳を疑った。聞こえた言葉はわかって、まさか、という思いがした。見合いの席での最初の質問としては、あまりにも場ちがいである。

「IQというと……」

念のため、きき返すと、千枝の方がふしぎそうな顔をして、

「知能指数のことですけど」

ごく当り前の質問なのにと、いわんばかりなので、秋雄はいよいよどきまぎして、
「それはわかってますが、しかし……。つまり、あなたは、まず、ほとくの知能指数が知りたい、
というんですか」

千枝は大きくうなずいて、

「お差し支えなかったら、ぜひ、うかがいたいんですけど」

「気になるんですか」

「はい」

千枝は素直にいい、秋雄を見つめた。

こほれそうなほど大きな目。目だけが勝手に語りかけてくるようで、その一方では、思いつめたような光を秘めた目である。秋雄を見ながらも、さらにずっと先のことまで見通していそうな目でもあった。その右目の下から唇にかけて、いくつか、ごまを散らしたようなそばかすがある。涙の黒いあとにも似ている。

瘦せて小柄。顔も小さく、口もとからあごにかけてもさびしい。それだけに、よけい、大きな目の中にひきこまれそうであった。

その目に見とれながら、秋雄はいった。

「学歴を気にするというのは、よく聞くけど、知能指数が気かりだなんて、初耳ですね」

「だって、知能指数は、子供に遺伝しますでしょ。学歴は遺伝しませんもの」

「……なるほど」

秋雄が苦笑すると、千枝は少し甘えるように、たたみかけてきた。

「ねえ、IQはおいくつですの」

どうしても、きかずにはおかない、といった表情である。

秋雄は、苦笑を深めながら答えた。

「たしか、一五三でした。小学三年のときかな」

とたんに、千枝は叫び声を上げた。

「一五三！ わあ、すてき、すてきですわ」

両手で胸をかかえこむ。目に見えぬその数字を抱きしめて逃すまい、とするかのようにある。

小学生ならともかく、見合いにきた二十四歳の女としては、異常である。知能が低いわけではない。短大の保育科卒で、保母歴三年と聞いている。そうした女が、なぜ、知能指数ひとつにそんなにはしゃぐのか、秋雄はしらけるよりも、興味を持った。ヤジ馬根性というか、何にでも適当に好奇心を持つところが、秋雄の強みであり、弱点でもある。

秋雄は、お返しの意味でも、きいてみた。

「あなたの知能指数は」

「わたし、最高で一六でした」

「上等じゃありませんか」秋雄は、そういったあと、思いついて、「もっとも、学者にいわせると、一〇〇以上は、一一〇だろうと、一八〇だろうと、結局同じことで、知能の程度に差があるものじゃないそうですよ」

「でも、高い方がいいですわ。一五三！ 一五三なら、申し分ないわ」千枝は、うっとりしたようにつぶやき、「わたし、きつと高いだろうとは思っていました。だって、あなたのお父さまは、東大法学部御出身なんですものね」。

「というと、やはり学歴を。それなら、ぼくはだめで……」

いいかける先を、千枝は急いで遮り、

「血筋なんです。優秀な血統を受け継いでいるということ、それが大切なんですわ。矛盾するようには聞えるかも知れませんが、遺伝しないのは学歴であって、その学歴にふさわしい血筋は、遺伝しますものね」

「そうでしょうか。ぼく自身も、わるい例外ですが、うちの会社のトップも旧帝大出ぞろいなのに、その息子でおやじと同じコースへ入れたのが、これまで一人もいないんですよ。同じ大学でも、文学部あたりへ入ったのはあるようですけどね」

「それは、きつと、家庭のせいですわ」

「いや、どこの家も、亭主はともかく、御夫人たちがたいへんな教育ママばかりなんですよ」
「いわゆる教育ママでは、だめなんですの」

千枝は、そういい切ったあと、大きな目で遠くを見る目つきになって、
「わたしなら、理想どおりに、やってみせるんですけど」

聞きずてにできないことを、さっぱりといった。本気でいった証拠に、目が強い輝きを帯びる。
「その理想という意味は……」

秋雄が聞いかけると、千枝は、はっとしたように、首をすくめた。

「あら、わたし、よけいなおしゃべりをして。……それより、わたしに、もうひとつ質問をさせてくださいませんか」

話の腰を折られたにもかかわらず、秋雄は、うなずいた。そこでまた、もう一度ゆさぶられるとも知らずに。

千枝は、秋雄の目を見つめていった。

「あなた、出世したいとお考えですか」

初対面の女性に、それも、まともにきかれたのでは、答えようがなかった。

「えっ」

といったきり、大きく口を開けたままの秋雄を見て、千枝はうすく笑い、

「また愚問かしら」

「……まるで、にっこり笑って人を斬る、といった質問ですね」

「ごめんなさい」

笑顔で詫びながらも、しかし、千枝は秋雄を逃さなかった。

「いかがですの。率直なところを、お聞かせいただけませんか」

「……先刻もいったように、うちの会社では、ほくのような二流三流の私大卒では、出世のしようもないですよ」

「じゃ、あきらめていらっしゃる？」

「……あきらめざるを得ないんです。もっとも、もともと、それほど出世しようという気もなかったんですが」

うなずきをくり返す千枝に、秋雄は少し自分を恰好よく見せるため、自虐的につけ加えた。

「出世でこり固まった男もおもしろくないが、出世をすっかりあきらめた男も魅力はない、といいますね。残念ながら、ほくは、後者の方ですよ」

ところが、千枝は、なお、大きくうなずいた。

「たいへん結構なお答えですわ」

からかわれているのかと、さすがの秋雄もかたい口調になって、

「どうですか」

千枝は、大きな目で秋雄を見たまま、うたうようにいった。

「だって、夫というか、父親自身の出世欲は、わたしの理想の育児にとって、じゃまにしかありませんもの」

「何ですって」

千枝は、それにはとり合わず、

「最後に、もうひとつだけ質問させてください」

たたみこまれると、秋雄の気合い負けであった。

「……どうぞ」

「御趣味は何ですか」

三問目に、ようやく見合いらしい質問を受けたと思ったが、千枝の受けとり方が、またふつうとはちがつていた。

「碁将棋も、野球も、ゴルフも、マージャンも、釣りも、みんなかじりましたが、とくにこれといった趣味はありません。多趣味のようで、案外、無趣味に近いのかな」

秋雄が答えると、千枝はにこにこして、

「結構ですわ」

「また皮肉ですか」

「いいえ、わたし、ひとつも皮肉など申ししていません。本気でそう思っているのです」

「しかし……」

「質問をしたあとでいうのも、変ですけど、ひとの趣味をきくのは、本当は悪趣味ですわ。趣味のない人間が、まるで人間でないみたいになりますもの」

秋雄がうなずくと、千枝は重ねるようにいった。

「世間でいう趣味だけが、趣味ではありませんものね。イギリスでは、一日中、ぼんやり船を見

ているのも、りっぱな趣味だというではありませんか。それに、女にとっては、たとえば育児だって、最高にりっぱな仕事であるだけでなく、最高にすばらしい趣味になると思います」

千枝の顔を、秋雄はあらためて見直しながら、念を押した。

「育児が趣味なんですか」

「ええ、堅実で、創造的な趣味ですわ。だって、子供は親によって、つくられますでしょ。思いのままに、どんな風にだって」

「しかし、粘土をこねて、彫刻をつくるようなわけには行かんでしょ」

「いえ、同じことだと思います。まず吟味して、いい材料というか、いい血統と結ばれる。そこからはじめれば、思ったとおりのすばらしい作品ができだと思います」

「すばらしい作品というと」

「たとえば、東大文一つまり東大法学部へ楽々に入れるような子供。いえ、たとえばでなく、わたし、本気でつくってみたいの」

「そんなことができるんですか」

「やってみたいの。せっかくの人生ですもの。女だって、何か大きな実験をしてみなくてはつまりませんわ。わたし、そのための計画を、ずっと練ってきました」

「計画が要るんですか」

「もちろん。だって、まず男の子を生まなくてはいけないでしょ。それも、頭のいい子を」

「その計画が立つんですか」

「ええ。これまでの勉強の成果を生かせば、十分、計画的に行けると思います。このお見合いだって、その第一段階です」

秋雄は、「種」とか「種馬」とかいう卑猥な言葉がのどもとまで出かったのをこらえて、

「つまり、粘土選びということですか」

「厳密に言えば、粘土以前の粘土ということかしら」

「粘土と粘土をこね合わせて、新しい粘土をつくる……」

目の前の可憐な肉体ともみ合うさまを想像して、秋雄の声は思わずかすれた。

千枝が澄んだ目で、無心にうなづく。

秋雄はみだらな想像が恥ずかしくなり、あわてていい足した。

「ほくは粘土以前の材料ということなんですわね。わかりました。だから、あなたは、いきなり、
ほくの知能指数のことを……」

へやっと、その意味に気づくなんて、おれのIQもずいぶん低下したものだ」

と、秋雄は内心、苦笑した。

千枝が続けた。

「わたし、両親にたのんで、今年になるまで、一切縁談を持ちこまぬようにしてもらってきまし
た。結婚は二十四歳のときと、決めていましたから」

「どうしてまた二十四歳と」

「学説によると、女性が母体として成熟して、最高の状態にあるのが、二十五、六歳ですって。
だから、逆算して……」

「……………」

「こんな風に、受胎前から、一事が万事、ベスト、ベストと心がけて行けば、すばらしい子供が
つくれて、おかしくないと思いますわ」

秋雄は、つりこまれて、うなずいた。

千枝の話を聞いていると、秀才や英才が粘土細工のようにつくれそうな錯覚がしてきた。